

初期俳諧と『論語』 古注本・新注本との関係について

吉 田 健 一

一、はじめに

初期俳諧を先導した松永貞徳は、『俳文学大辞典』⁽¹⁾によれば、元亀二(一五七一)年生まれ、承応二(一六五三)年没とされている。この貞徳の句に「酒の朋遠方よりやきくの宿」(崑山集 六二〇九)⁽²⁾がある。句中の「朋遠方よりや」という部分が『論語』学而一の「有朋自遠方来」⁽³⁾によることは明らかである。

初期俳諧が勃興し、隆盛に至った室町時代後期から江戸時代初期にかけて『論語』については古注本に拠る読み方よりも新注本に拠る読み方が優勢になる時期であった。この時期には貞徳の句のように『論語』を摂取した句が他にも見られる。これら初期俳諧期の句の中の『論語』由来の語句は何晏の『論語集解』や皇侃の『論語集解義疏』等に基づく古注本から摂取したのであろうか。朱熹の『論語集注』に基づく新注本からであろうか。このことを探求することにより、初期俳諧に携わった者たちの漢学に関する教養の基盤の一端が明らかになるのではないかと思われる。

ここで本論の先行研究について述べるべきであるが、初期俳諧と『論語』古注本・新注本との関係をテーマとした研究書や論文は管見の及ぶ限り見出せない。そこで範囲を広げ、日本の古典文学と『論語』古注本・新注本との関係に言及した先行研究ということになると、本論末尾に挙げた参考文献七の古澤未知男「漢籍引用より見た徒然草の一考察」を始めいくつかの研究書や論文が見出せる。これらについては必要に応じて言及することにする。

なお、本論文報告者は「医療創生大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇 第5号(通巻第33号)」(二〇二〇年二月)において「初期俳諧における『論語』の摂取について」と題する論考を発表した。これは江戸時代初期の俳諧による『論語』の摂取と同時期の日本漢詩による『論語』の摂取とを対比し、それぞれの特徴を述べたものである。今回の報告は初期俳諧時代の句による『論語』の摂取が日本の古注本からなのか、新注本からなのかを調査・検討することを主眼としている。

二、初期俳諧より前の日本の文学作品と『論語』との関係

初期俳諧より前に散文で書かれた文学作品による『論語』の本文あるいは注の撰取については、『枕草子』第四六段と学而八との関係⁽⁴⁾、『源氏物語』第十帖「賢木巻」と子罕二九の古注との関係⁽⁵⁾、『徒然草』のいくつかの段と『論語』との関係⁽⁶⁾、『さゝめごと』の「生涯修行すべきこと」の段と子罕二二及び憲問四五との関係などが指摘されている。

ここでは、俳諧の近隣の分野である和歌による『論語』の撰取について述べる。『論語』からの引用箇所傍線を付すことがある。作品の次に『論語』の該当箇所を掲げる。

A へつらひてたのしきよりもへつらはでまづしき身こそ心やすけれ 無住（国5巻—三八八『沙石集』一三〇）⁽⁸⁾

学而一五 子貢曰、貧而無諂、富而無驕、如何、子曰、可也、未若貧而樂道、富而好禮者也

B 不義而富且貴於我如浮雲といへることを

身にたへぬ我が名もよしや半天にうかべる雲のありてなければ

惟宗光庭（国一卷—一八『新千載集』一九四九）

述而一五 不義而富且貴、於我如浮雲

C 日に三たびおろかなる身をかへりみてつかふる道もわが君のため

入道前右大臣（国一卷—二二『新葉集』一二四〇）

学而四 吾日三省吾身

D ひまもなく植るさなへを見てもしれ 民をつかふる時のありとは 十市遠忠（私七巻—五「遠忠I」三五）⁽⁹⁾

学而五 道千乗之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時

E ことにいてはをろかにやとて日に三たび かみかみる身の思ひとかしる 飛鳥井雅敦⁽¹⁰⁾（私七巻—二七「雅敦卿御詠草」二五四）

F あさくらのこゑはふけつゝ、うたふ也 本たちてより末の世まで 三条西実条（私七巻—五一「実条Ⅷ 実条公御詠草」⁽¹¹⁾二五）

學而二 君子務本、本立而道生

以上の和歌のうち、注目すべきはBである。詞書が「不義而富且貴於我如浮雲といへることを」となっているが、これはこの題に応じて作歌したことを意味している。『新千載和歌集』（延文四（一三五九）年撰進）の時代には、『論語』の中の語句が歌会で題として出されるほどに歌詠みたちの間に浸透していたことが窺える。

次に注目すべきはCの歌と「論語」しりにて御入候歟」という言葉が添えられているEの歌とである。この二つは学而四の「吾日三省吾身」を踏まえている。詳しくは後述するが、この中の「三」は日本の古注本では「ミタビ」、新注本では「ミツ」と読まれる。CとEはいずれも古注本の読み方によっている。

以上、和歌においても『論語』を撰取した作品が認められる。

三、初期俳諧における『論語』撰取の例

(一)古注本から新注本からが見分けがつかない場合

ここから初期俳諧における『論語』撰取の例を古注本及び新注本の

読み方と比べながら見ていく。以下に引用する句のうち『論語』と関連があると思われる箇所には傍線を施した。

句の後に、『論語』の被引用箇所の篇・章を示した後、古注本及び新注本のうち句に関係があると思われる箇所を挙げた。古注本としては、『建武鈔本論語集解』(『建武本』と略す)を代表として掲げる。新注本としては元亀四(一五七三)年に書写したことが奥書に記されている『元亀四年本 論語集注』(『元亀本』と略す)を用いる。訓点、返り点、音合符、訓合符、正訓、左訓、送り仮名を示すにとどめ、それ以外の記号や書き込みは省略した。配列は句が収録されている句集や俳諧撰集の発行順とする。

A 本立て道生物やかどの松 道節(歳旦発句集)四二一ほか(学而二)

『建武本』 君一子^ハ務^ツ本^ム一^{モト}立^{タツテ}而^{ミテ}道^{ナル}生^{ナル}

『元亀本』 君一子^ハ務^ツ本^ム一^{モト}立^{タツテ}而^{ミテ}道^{ナル}生^{ナル}

B 朋友とまじはるに^レよき新酒哉 道之(『続山井』五〇三二)(学而四)

『建武本』 與^ト朋^{ホウ}一^{イフ}友^{イフ}一^{マシ}交^{ハツテ}言^{コト}而^{シテ}不^レ信^{シテ}乎^ヤ

『元亀本』 與^ト朋^{ホウ}一^{イフ}友^{イフ}一^{マシ}交^{ハツテ}言^{コト}而^{シテ}不^レ信^{シテ}乎^ヤ

C 網にかかる天命をし^レれ五十雀 保友(『続境海草』九九九)(為政四)

『建武本』 五^ニ十^ニ而^{シテ}知^ル天^メ一^イ命^ヲ

『元亀本』 五^ニ十^ニ而^{シテ}知^ル天^メ一^イ命^ヲ

D 一もつてくはんと^レうの代や君が春 松村吟松(『桜川』二七)(里仁一五ほか)

『建武本』 吾^{ワガ}道^{タウ}一^ハ以^{コト}貫^{セリ}之^レ哉^ヤ

(「以」の左訓「モツテ」)

『元亀本』 吾^カ道^ハ一^ハ以^テ貫^レ之^レの後に「哉」の字無し)

『俳文学大辞典』等により、各俳書の刊年を記すと、Aの句が収録されている『歳旦発句集』は寛永一九(二六四二)年のものである。

Bの『続山井』は寛文七(二六六七)年、Cの『続境海草』は寛文一〇(二六七〇)年、Dの『桜川』は延宝二(二六七四)年が刊年となっている。

各句を見ると、『論語』本文をそのままの形で引用しているので、『論語』を撰取していることがすぐ分かる。では、一歩踏み込んで、『論語』の語句の撰取が古注本からなされたのか、新注本からなされたのかまで分かるだろうか。

例として、Aの「本立て道生物やかどの松」を見てみよう。この中の「本立て道生物や」は、普通に読むと、「もとたつて みちなるものや」になると思われるが、これが學而二の「本立而道生」によることは明らかである。

この被撰取箇所である「本立而道生」の『建武本』の読み下しはひらがなで書くと「もとたつて みちなる」となると思われる。『元亀本』では「もとたつて しかうして みちなる」となるであろう。両者を比べると、『建武本』では読まない「而」を『元亀本』では読むという違いが見られるが、この部分は句に取り込まれていないので、ここを除くと、『建武本』と『元亀本』とでは読み方に特段の違いは認められない。『建武本』以外の古注本、『元亀本』以外の新注本を見ても、やはり違いは見られない。よって、Aの句の『論語』撰取箇所が古注

本からなのか、新注本からなのかは見分けがつかない。B以下の例も、同様である。

（二）『論語』古注本から新注本から見分けがつく場合

俳諧の句の中のある個所が『論語』からの引用であることが分かる場合であっても、古注本から新注本からかを確定することは難しい。しかし、和歌における『論語』の摂取のところで述べたように、たとえば学而四の「吾日三省吾身」の「三」は古注本では「ミタヒ」、新注本では「ミツ」と読まれるので、学而四からの引用箇所がそのどちらになっているかによって古注本から新注本からかを確定することができる。

以下、『論語』本文あるいは注からの摂取が見られる初期俳諧の句のうち、古注本から新注本からかを見分けがつくものを挙げる。句に本章第一節の最後の例句の番号Dに続けて、連番で番号を付ける。『論語』のある語句を取り込んだ句の例を複数挙げる場合は、アルファベットの番号の後に①②などと記す。句の後に古典ライブラリー「日本各図書館」による句番号を付す。次に、句に摂取された『論語』本文を注（3）に挙げた金谷治訳注の『論語』により示す。その後に、『論語』古注本と新注本の該当箇所を示す。古注本・新注本の本文での略称と本来の資料名・由来等は次の通りである。

古注本

『建武本』…注13を参照されたい。

『足利本』…『足利本 論語抄』。原本は足利学校第七世座主九華（明応九年＝一五〇〇～天正六年＝一五七八）の自筆とされる。足利市銭

阿寺蔵。九華が清原国賢より授けられた『論語抄』に経文を補い、手元に蔵して自らの講述に資したものとされる。本論文では中田祝夫編『足利本 論語抄』（勉誠社一九七二年影印本）を用いる。

『要法寺』…要法寺版の『論語集解』。内閣文庫蔵。函番号八五〇二。本の末尾に「慈眼刊 正運刊 洛訥要法寺内開板」とある。刊行時期の記述はないが、国立公文書館デジタルアーカイブの書誌事項に「刊本、慶長、要法寺」とある。

新注本

『元龜本』…注14を参照されたい。

『文之点』…文之玄昌点『大魁 四書集注』。寛永二（一六二五）年刊。本論文では東京都立中央図書館・特別買上文庫・蜂屋茂橘旧蔵資料（特六四一九）の『大魁 四書集注』（表題に「寛永九年^{壬申}孟夏吉辰重刊」とあるもの）の中の『論語』を用いる。

『石川本』…石川県立図書館・河崎文庫蔵。林道春点『論語集註』と『孟子集註』の二冊から成る。「孟子卷之十四」の末尾に「慶安庚寅暮夏吉旦 書林豊興堂新梓行」とある。慶安庚寅は慶安三（一六五〇）年に当たる。鈴木直治『中国語研究学習双書12 中国語と漢文』（光生館 一九七五年）八一～八二頁に本書紹介の記述がある。

『石斎点』…内閣文庫蔵。函番号漢四九四七。鵜飼石斎点『四書集註大全』の中の『論語集註』。慶安四（一六五二）年跋刊。

『道春点』…内閣文庫蔵。函番号漢一三三一八。林道春点『四書集註』十冊のうちの『論語』。寛文四（一六六四）年、野田庄右衛門開板。

以下、句例を示す。『論語』本文或いは注釈に関連があると思われる

る箇所に傍線を付す。

E ①色葉をやまんで時にならがしは⁽¹⁷⁾ 季吟『山之井』九二九

／『玉海集』二二三五

②たぞ声を学んでならへ時の鳥 長頭丸『崑山集』三一八六

③習得てしばしばとびの巢立哉 重義『ゆめみ草』八〇九

④出格子のひまもる月に目をさまし／学んで夜る夜る読書しぬ
めり 信徳『信徳十百韻』五一九／五二〇

⑤時に是をならふに似たり踊歌 器水『誹諧当世男』一二二二
各句が収録されている俳書の刊年（明確でない場合は、自序などの
年を挙げる）は、『山之井』が正保五（二六四八）年、『玉海集』明暦
二（二六五六）年、『崑山集』慶安四（二六五一）年、『ゆめみ草』明
暦二（二六五六）年自序、『信徳十百韻』延宝三（一六七五）年、『誹
諧当世男』延宝四（一六七六）年自序である。

学而一 学而時習之

『建武本』 子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ

〔注〕王肅曰時者学者以^レ時誦^ス習^ス之誦^ス習^ス以^レ時^ニ学^ハ無^シ

レ 廢^レ業^{……}

『足利本』 子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ

〔注〕子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲハ明^ス幼^ニ少^ニ学^ハ（以下、省略）

『要法寺』 子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ

〔注〕王^一肅曰時者学者以^レ時誦^ス習^ス之^ヲ

『元龜本』 子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ不^レ亦^ニ説^ハ乎^ヲ

〔注〕習^ハ鳥^ノ數^ハ飛^ハ也^ニ。学^ハ之^ハ不^レ已^ニ如^シ二^ニ鳥^一數^ハ飛^ハ一^也 説^ハ

喜^ハ意^ハ也^ニ既^ニ学^ハ而^ト又^ニ時^ニ々^ニ習^ハ之^ハ則^ニ所^ニ学^ハ者^ハ熟^ニ而^ト中^ニ心^ハ喜^ハ説^ス……

『文之点』 子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ不^レ亦^ニ説^ハ乎^ヲ

〔注〕習^ハ鳥^ノ數^ハ飛^ハ也^ニ学^ハ之^ハ不^レ已^ニ如^シ二^ニ鳥^一數^ハ飛^ハ一^也

説^ハ喜^ハ意^ハ也^ニ既^ニ学^ハ而^ト又^ニ時^ニ々^ニ習^ハ之^ハ則^ニ所^ニ学^ハ者^ハ熟^ニ而^ト中^ニ心^ハ喜^ハ説^ス……

『石川本』 学^ハ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ不^レ亦^ニ説^ハ一^乎

〔注〕習^ハ鳥^ノ數^ハ飛^ハ也^ニ学^ハ之^ハ不^レ已^ニ如^シ二^ニ鳥^一數^ハ飛^ハ一^也 説^ハ喜^ハ意^ハ也^ニ既^ニ学^ハ而^ト又^ニ時^ニ々^ニ習^ハ之^ハ則^ニ所^ニ学^ハ者^ハ熟^ニ而^ト中^ニ心^ハ喜^ハ説^ス……

『石肅点』 子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ不^レ亦^ニ説^ハ一^乎

〔注〕習^ハ鳥^ノ數^ハ飛^ハ也^ニ学^ハ之^ハ不^レ已^ニ如^シ二^ニ鳥^一數^ハ飛^ハ一^也 説^ハ喜^ハ意^ハ也^ニ既^ニ学^ハ而^ト又^ニ時^ニ々^ニ習^ハ之^ハ則^ニ所^ニ学^ハ者^ハ熟^ニ而^ト中^ニ心^ハ喜^ハ説^ス……

喜^ハ説^ス

『道春点』 子曰^シ学^ノ而^ト時^ニ習^ハ之^ヲ不^レ亦^ニ説^ハ一^乎

〔注〕『石川本』と同じ。

古注においては、王肅の注に見られるように、学習した内容を「時を
以て」即ち適切な時に復習することが大切と解している。これを受けて、
『建武本』では、「時」は「トキニ」と読まれている。『足利本』は「時」
となっているが、これは「トキニ」の「ニ」のみを表示したものとと思
われる。『要法寺』は「時・習之」とあり、「時」には読み方が示されて
いないが、注に「以^レ時」とあり、これは「トキヲモツテ」と読むと思
われるので、「時・習之」の「時」も「トキニ」と読むと思われる。
これに対して、新注では学んだことを鳥が絶えず飛び回るように常

に復習することが大切であると解している。そのことは「既学而又時時習之」という朱注の表現によく現れている。この「時時」は「何度も繰り返し返して」という意味であろう。これを受けて、日本の新注本では、『石齋点』、『石川本』、『道春点』に見られるように、本文の「時」を「ヨリヨリ」と読むのが主流となっている。なお、『元亀本』と『文之点』では「時」とあるので、「トキニ」と読む可能性が高い。これは、古注本・新注本の交代期の中では比較的早期に成立したため、古注本の読み方を踏襲したのではないかと思われる。

以上のことから、句例のうち、①「色葉をやまなんで時にながらしは」及び⑤「時に是をならふに似たり踊歌」は「時に」を「トキニ」と読み（なお、「是」は「コレ」と読むと思われる）、②「たぞ声を学んでならへ時の鳥」は「時」を「トキ」と読んでいたので、これら三例は古注本または新注本のうちの『元亀本』、『文之点』から撰取した可能性が高い。

次に、④「学んで夜る夜る読書しぬめり」の「夜る夜る」は「ヨルヨル」と読むと思われる。この読み方は「ヨリヨリ」に近いので、この論文で挙げた新注本の中では、『石川本』、『石齋点』、『道春点』のいずれかを参考にしたと思われる。

また、②「たぞ声を学んでならへ時の鳥」は、新注では学習することの説明に鳥の動きを例に挙げているので、「時」については古注本により、「鳥」については新注本を参考に行っている可能性がある。新注本としては、『崑山集』の成立年から見ても、『元亀本』か『文之点』を参考にした可能性が高い。ただし、貞徳は林道春と深く交流していたので、道春から直接学んだ可能性もある。

③の「習得てしばしばの巢立哉」の「習得て」は「ナラヒエテ」と読むと思われる。この句の「習」は学而一の「学而時習之」の「習」と一致するが、これだけでは学而一から取り込んだのかどうかは分からない。しかし、「しばしばとび」という表現が新注の「習鳥數飛也」の読み下しに一致する。たとえば、『元亀本』ではここが「習鳥數飛也。」となっており、「習ハ鳥ノ數飛フナリ」と読むと思われる。「しばしばとび」は新注本共通の「數飛フ」という表現から得たのかも知れない。ただし、上に並べた新注各本の注釈部分を見比べると、この部分の読み方はどの新注本でもほぼ同じなので、新注本の内のどれかを読んでいたかまでは分からない。

F ただしくも行ふ仁義礼智信 重次（『鷹筑波』一二九〇）
『鷹筑波』は寛永一九（一六四二）年開板である。

下記の説明においては、煩を避けるため、注の部分の挙げるのは『建武本』、『足利本』、『元亀本』のみとする。

学而一 孝弟也者、其爲仁之本與

『建武本』 孝弟也者其爲仁之本與

〔注〕 先能事父兄然後可乃仁成

『足利本』 孝弟也者爲其仁之本與

〔注〕 孝悌ハ仁道ノ根源ソ……仁ヲアクレハ義礼知信ノ四ヲ含ム也

『要法寺』 孝弟也者其仁之本與

『元亀本』 孝弟也者其爲仁之本與

〔注〕 爲仁猶曰行仁……程子……蓋仁是性也 孝弟ハ是性也 性ハ中只有二箇仁義礼智四者而已

『文之点』 孝一弟也者其^{ナリト云ハレ}爲^{オコナフ}仁之本^ヲ與

『石川本』 孝一弟也者其^{スル}爲^{コナフ}仁之本^ヲ與

『石齋点』 孝一弟也者其^ハ爲^{ヲコナフ}仁之本^ヲ與

『道春点』 孝一弟也者其^{スル}爲^{コナフ}仁之本^ヲ與

「ただしくも」の句は学而二の「爲仁之本」を引いていると思われる。古注本では「爲」の字が無いものもあり、その場合は「仁ノ本」と読まれる（『要法寺』）。「爲」の字がある場合（『建武本』、『足利本』は「仁ノ本爲ル」と読まれている。これに対し、新注本では注にある「爲仁猶曰行仁」の「行仁」の意を汲んで、「仁ヲ爲フ（ノ）本」と読むのが基本である（ただし、「フ」を「ウ」と記すものもある）。これと意味は同じであるが、『石川本』や『道春点』の左訓のように「爲」に「スル（ノ）」と付訓する本もある。

この句の「行ふ仁」は、学而二の「仁之本」の前に「爲」の字がありかつこれを「ヲコナフ」と読む新注本から摂取した可能性が高い。「行ふ仁義礼智信」とあるのは、新注の「性中只有箇仁義禮智四者而已」の読み下しを参考にしたものと思われる。ちなみに「元龜本」の注の「性一中只有箇仁義礼智四者而一已」を私に読み下すと「性中、只箇ノ仁義礼智四ツノ者ノ有ルノミ」となる。

なお、『足利本』も注に「仁ヲアクレハ義礼知信ノ四ヲ含ム也」とあり、「信」の字も出てくるのでこちらの方がこの句の「仁義礼智信」に近いとも言えるが、そもそも本文が異なるので、『足利本』から引用したということはないと思われる。

新注本のうちのの本から取り込んだかまでは、各新注本の被摂取箇

所に対応する部分の訓点に大きな違いがないので、分らない。

G ①日に三たび身をかへりみよ（『毛吹草』「世話」¹⁹）

②我日々に三つながら見ん雪月花 元恕（『宝蔵』一二二五）

③日に三度水かへり見よ湯殿行 維舟（『時勢粧』一八五五）

④夜に三度日に三度つつ乱れ髪 西鶴（『俳諧虎溪の橋』二六九）

『毛吹草』は正保二（一六四五）年刊、同書「世話」は当時のことわざを収める。『宝蔵』は寛文一一（一六七二）年、『時勢粧』は寛文一二（一六七二）年、『俳諧虎溪の橋』は延宝六（一六七八）年頃の刊である。

学而四 吾日三省吾身……傳不習乎

『建武本』 吾日三省^{ワレヒニミタヒカエリミル}吾身^{ワガミミ}

『足利本』 吾日三省^{ワレヒニミタヒ}吾身^{ルニミカミ}

『要法寺』 吾日三省^{ヒ、ミタヒ}吾身^{カルミマ}

『元龜本』 吾日三省^{レヒニミツカエリミヤン}吾身^{ニミツカヘリミヤ}

『文之点』 吾日三省^{ニミツカヘリミヤン}吾身^{レミツカヘリミヤ}

『石川本』 吾日三省^{レヒニミツカヘリミル}吾身^{ニミツカヘリミル}

『石齋点』 吾日三省^{レヒニミツ}吾身^{ニミツ}

『道春点』 吾日三省^{ヒ、ニミツナカラ}吾身^{ラ以テ省ニミツ}

ここに示す通り、日本の古注本では「三」は「三度（ミタヒ）」と読まれ、新注本では「ミツ」と読まれている。

句例として挙げた中では、①の『毛吹草』のことわざにおいては「三」は「ミタヒ」と読まれている。これは古注本の勢力が強かった時期にこの読み方が定着したものであろう。③と④の「三度」は「ミタヒ」と読むと思われるが、これも古注本を参考にした可能性が高い。ただ

し、当時の諺を取り入れたのかもしれない。②は「三ツ」とあるので、新注本の読み方を取り入れていると思われる。

H 不仁者もみてや樂しむ山桜 友久（『続山井』二一九七）

『続山井』は寛文七（一六六七）年刊である。

雍也二三 知者樂水、仁者樂山、……知者樂、仁者壽

『建武本』 知者樂水、仁者樂山、……知者樂、仁者壽

『足利本』 智者樂水、仁者樂山、……智者樂、仁者壽

『要法寺』 知者樂水、仁者樂山、……知者樂、仁者壽

『元龜本』 この部分、残存せず。

『文之点』 知者樂水、仁者樂山、……知者樂、仁者壽

『石川本』 知者樂水、仁者樂山、……知者樂、仁者壽

『石齋点』 知者樂水、仁者樂山、……知者樂、仁者壽

『道春点』 知者樂水、仁者樂山、……知者樂、仁者壽

句の中に「仁者」「樂しむ」「山」とあり、これを組み合わせると「仁者は山を樂しむ」となるので、この句は雍也二三の「仁者樂山」を基にしていると思われる。しかも、雍也二三の「樂」の字を日本の古注本では、通例、三つすべて「タノシム」と読み（ただし、『文之点』の直後に出された『要法寺』では二つ目の「樂」の左訓として「ネカフ」とある）、新注本では最初と二つ目の「樂」を「ネカフ」（「樂上二字竝五教反」という発音の注記から）或いは「コノム」（「樂喜好也」という注から）と読むので、「不仁者も……樂しむ」とある日の句は古注本からの取り込みがなされている可能性が高い。なお、句の冒頭の「不仁者」という言い方は里仁二、同六、憲問七に見える。

次に、日本の古注本・新注本の訓読の変化に伴った場合の例を挙げ、従って、古注対新注という枠組みからは外れる。初めに、「子曰」の読み方に関連する句を取り上げる。

I ①物知のはらより出るしやくしゆたう／養性せずばしのたう

まぐ（『夫子集』二六三六／二六三七）

②露の世としのたまはく小笹哉（『崑山集』四七二〇）

③のたまはく夫十万石とをからず 似春（『宗因七百韻』八三）

『夫子集』は寛永一〇（一六三三）年序、『崑山集』は慶安四（一六五二）年、『宗因七百韻』は延宝五（一六七七）年頃の刊である。なお、作者名が記されていない句は、作者名が伝わっていないものである。

「子曰」は『論語』の至る所で使われているが、ここでは学而一「子曰、学而時習之」の「子曰」の読み方を見る。ただし、学而篇が滅失している本については他の箇所を見る。なお、古注本の調査対象とする本を増やし、これまで挙げてこなかった本も参看する。

学而一 子曰

『高山寺藏論語』『清原家本卷第八』^{②〇} 学而篇は滅失。衛靈公一「衛

靈公問陳於公、孔子對曰」の「對曰」が「對曰」となっ

ている。このほか、「子曰」「孔子曰」の「曰」に「ノタウハク」

という正訓がある箇所が見える。

『正和四年本論語集解』子曰（この部分、訓点無し）

『建武本』子曰

『論語』（清家文庫S121室町期写）子曰

『成實堂藏本論語鈔』子曰

『足利本』子曰（この部分、訓点無し）

『永祿本』⁽²⁴⁾ 子曰^{ノタクハク}

『要法寺』 子曰（この部分、訓点無し）

『元龜本』 子曰^{ノタマハク}

『文之点』 子曰

『石川本』 子曰（この部分、訓点無し）

『石齋点』 子曰

『道春点』 子曰（この部分、訓点無し）

日本の古注本、新注本における「子曰」の読み方の流れを見ると、古い時代には「子ノ ノタウハク」または「子ノ ノタウマク」と訓じられていたが、『成實堂藏本論語鈔』で「子ノ ノタマハク」というやや簡略化された訓じ方に変わっている。これが、「子曰く」という現代でも用いられる簡潔な読み方に繋がっていくのである。

ここで、①から③に挙げた句を見ると、①は「しののたうまく」とあり、ここに挙げた古注本の中では『建武本』の左訓と一致している。②及び③の句は「のたまはく」とあるので、『成實堂藏本論語鈔』より後の本を基にしていると思われる。

なお、『文之点』、『石川本』、『石齋点』、『道春点』の「子曰」には付訓されていないが、これは②及び③の句に「のたまはく」とあることに見られるように、この時期には「子曰」の「曰」を「ノタマハク」と読むことが一般的だったために、付訓しなかったのではないかと思われる。逆に、俳諧作品の中に「のたまはく」という言い方があることが、この時期、「曰」が「ノタマハク」と読まれていたことの証左になっているとも言える。

J ① 飛騨梅に言葉の花をたくみ哉 道益（『続山井』一七四四）

②花の歌や詞巧の家ざくら 如醉（『時勢粧』六一一）

『続山井』、『時勢粧』の刊年は既出。

①の句は「言葉の花」から、②の句は「花」と「詞」から勅撰和歌集のひとつの『詞花和歌集』という歌集名との関連が考えられる。また、和歌にも「ちり残る法のはやしの梢にはこと葉のはなの色ぞすくなき 権大僧都澄俊（『続千載和歌集』九九〇）」を始め「言葉の花」や「詞の花」を用いた歌が多数あり、俳諧にも「小式部がこと葉の花のやさしさよ」正章（『正章千句』六七七）などがあるので、これらとの関連も考えられる。他方、「言葉」「たくみに」（②の「詞巧」は平仮名では「ことばたくみ」になると思われる）という語からは、学而三との関連も考えられる。

これについても、参照する古注本の範囲を拡大する。

学而三 巧言令色

『正和四年本論語集解』 巧言^{タクミ}令^ヲ色^{ヨク}

『建武本』 巧言^{タクミニシ}令^{コトヲ}色^{ヨクスルハ}

『論語』（清家文庫S121室町期写） 巧言^{タクミニシ}令^{コトヲ}色^{ヨクスルハ}

『足利本』 巧言^{ニシ}令^ヲ色^{ヨクスルハ}

『永祿本』 巧言^{タクミニシ}令^{コトヲ}色^{ヨクスルハ}

『要法寺』 巧言^{タクミ}令^{コト}色^{ヨク}

『元龜本』 巧言^{ヨクシ}令^ヲ色^{ヨクスルハ}

『文之点』 巧言^{ヨクシ}令^ヲ色^{ヨクスルハ}

『石川本』 巧言令色（塗抹後のもの）／巧言^{ヨクシ}令^{スルハ}色（塗抹前のもの）

のもの）

『石齋点』 巧言^{ヨクシ}令^ヲ色^{ヨクスルハ}

『道春点』 巧言令色

各本の読み方を見比べると、古注本の時代には「言ヲ巧ニシ色ヲ令クスルハ」（建武本）というのが標準的な読み方だったのに対し、新注本では「言ヲ巧シ色ヲ令クスルハ」（元亀本）などと読まれている。ただし、『石川本』は最初の姿は「巧言令色」であるが、後に振り仮名やレ点が塗抹され、「巧言令色」に改められている。

①及び②の両句は日本の和歌・俳諧からの取り入れも見られるが、「ことば」「たくみ」とあるところから『論語』古注本からも言葉を摂取していると思われる。

四、初期俳諧期の俳論による『論語』摂取の例

終わりに、初期俳諧期の俳論の中に『論語』古注本・新注本との関係を書いたものがあるかどうかを見てみよう。

延宝三（一六七五）年刊の岡西惟中（談林派）の俳論書『俳諧蒙求』⁽²⁶⁾に次の一節がある。片仮名の読み仮名は底本にあったものである。

孔子の友に原壤といふ人あり。……この人を、論語憲問十四朱子の註に、蓋老子之流、放ニ礼法之外一者也とあり。このちうのごとく、礼法の外にほしあまなるが、俳かいの根本なりとされるべし。

出典は憲問四五の「原壤夷俟、子曰、幼而不孫弟、長而無述焉、老而不死、是爲賊、以杖叩其脛」に対する『集注』の「原壤孔子之故人母死而歌 蓋老子之流 自放於禮法之外者」である。『俳諧蒙求』の「このちう」（この注）は『集注』のこの部分を指している。

主な新注本のこの部分に対応する箇所は次の通りである。

『元亀本』 この部分、残存せず。

『文之点』 原壤孔子之故一人母一死而一歌。蓋老子之流

自放ニ於禮一法之外一者

『石川本』 原壤孔子之故一人母一死而歌。蓋老子之流 自放ニ於

禮一法之外一者

『石齊点』 原壤孔子之故一人母一死而歌。蓋老子之流 自放ニ於

禮一法之外一者

『道春点』 原壤孔子之故一人母一死而歌。蓋老子之流 自放ニ於

禮一法之外一者

『俳諧蒙求』の執筆者である惟中が『論語』新注本を読んでいたことはこの段の記述から明らかである。では、新注本のどれを参照したのであろうか。上記の憲問四五からの引用箇所とここに並べた新注本の該当箇所とを比べると、前者の「老子」と後者の「老氏」とを除けば、両者はほぼ同じである。仔細に見ると、『俳諧蒙求』の「流」と新注本である『石齊点』の「流」とが同じ読み方になると思われるが、『文之点』、『石川本』、『道春点』の「流」も「流」と読む可能性もあるので、『俳諧蒙求』の憲問四五の引用箇所がどの新注本から取り入れたのかまでは分らない。

次に、江戸時代初期の俳書とされている『滑稽太平記』⁽²⁷⁾を見る。著者について、「古典俳文学大系2」の『貞門俳諧集二』六二七頁の解説に、季吟門弟北藤浮生に擬せられているが疑問とすべきであるとの記述があり、はっきりとしたことは不明である。成立時期については、記事が延宝八（一六八〇）年の松江維舟没をもって終わるので、その

後まもなくと考えられるが確証はない旨の記述がある。正確さを欠くが、一応その頃と考えてよいと思われる。

この『滑稽太平記』の「巻之六」に「井坂春清挙俳旗事」という段があり、そこに次の記述がある。

子曰、以_レ約失_レ之者鮮也。又、何晏集解に云、去_レ奢從_レ約、謂_二之儉_一と有をや。

この中の「子曰、以_レ約失_レ之者鮮也」は里仁二三の言葉である。これに続いて、「何晏集解に云」と言っているのであるが、『集解』を見ると里仁二三の注の部分は「孔安國曰俱不得中也奢則驕溢則招禍儉約則無憂患也」となっており、「去奢從約謂之儉」ではない。では、出典は何かということになるが、これは学而一〇の「子貢曰、夫子温良恭儉讓以得之、夫子之求之也、其諸異乎人之求之與」における「温良恭儉讓」の「儉」に対する皇侃『論語集解義疏』の疏に見える。よって、『滑稽太平記』の書名のあげ方には疑問が残るものの、この本の著者が古注本を読んでいた可能性は高いと思われる。

五、おわりに

以上、初期俳諧時代の句と日本の古注本、新注本との関係を実際の句例を基に考察した。

この時期は、日本の論語受容史の視点で見れば、古注本よりも新注本が優位になる時期に相当する。初期俳諧を領導した松永貞徳が誕生した元亀二（一五七一）年の二年後である元亀四年に新注本の『元亀四年本 論語集注』が書写されている。江戸時代に入ると、文之点に

よるものなど新注本が次々に刊行され、さらに林道春が大学頭に就任するに及んで、新注本優位が確立したのである。

このことが俳諧の世界にどのように影響したであろうか。この時期の句には『論語』の語句が入っているものがあるが、それらは古注本から摂取したのだろうか、新注本からだったのだろうか。

そのことが推測可能な句例として、古注と新注とでは解釈が異なることが原因で読み方に違いがある場合や、時代によって読み方が異なる場合についていくつかの例を見たところ、新注本からの摂取と見られる句と古注本からの摂取と見られる句がともにあることが分かった。この時期の俳論にも新注本を引いたと見られる記述、古注本を引いたと見られる記述の双方の存在が認められた。

このことは、『論語』の古注本が新注本に取って代わられつつあった江戸時代初期において、初期俳諧に携わる人々の中には、古注本になじんでいた者たちもいたが、新注本を『論語』についての教養の基礎として読んでいた者たちもいたことを物語っている。

さらに、彼らの『論語』摂取の範囲は、その本文だけでなく注にも及ぶ場合があることを確認した。

初期俳諧期さらには後の蕉門の隆盛期における俳諧作品、俳論及び俳諧辞書と『論語』古注本・新注本との関係については今後の課題としたい。

参考文献

- 一 石川洋子『近世における『論語』の訓読に関する研究』新典社 二〇一五年
- 二 尾形仿ほか編『俳文学大辞典』角川書店 一九九五年
- 三 岡部明日香「しをれる松の心象風景——源氏物語賢木巻、桐壺院哀悼場面における論語古注の投影——」『平安朝文学研究』四巻四八～六四頁 一九九五年
- 四 呉美寧「室町末期・江戸初期の論語集注本における古注の影響——元龜本・寛永本・寛文本を対象として——」『訓点語と訓点資料』（訓点語学会編一〇七号）一九〇三五頁 二〇〇一年
- 五 鈴木直治『中国語と漢文』中国語研究学習双書12 光生館 一九七五年
- 六 曹景恵『日本中世文学における儒釈道典籍の受容——『沙石集』と『徒然草』——』国立台湾大学出版中心（台北）二〇一二年
- 七 古澤未知男「漢籍引用より見た徒然草の一考察」山岸徳平編『日本漢文学史論考』岩波書店 三七一～三九三頁 一九七四年
- 八 古瀬雅義「『枕草子』『憚りなし』の指示する『論語』基本軸——行成との会話を支える『論語』古注と章段構想——」稲賀敬二編・新典社研究叢書一一八『論考 平安王朝の文学 一条朝の前と後』新典社 一六一～一八〇頁 一九九八年

注

- （一）尾形仿ほか編『俳文学大辞典』（角川書店 一九九五年）五九〇～五九一頁
- （二）『崑山集』は慶安四（一六五一）年刊。本論文で引用する句は、一部の例外を除き、『古典俳文学大系』（集英社 一九七二年）所収のものによる。引用に際し、古典ライブラリー「日本Web図書館」による句番号を付す。
- （三）この論文で引用する『論語』の本文及び読み下しは、断りのない限り、岩波文庫の金谷治訳注『論語』（岩波書店 一九九九年改訂新版）による。また、『論語』の章の番号（例えば、学而一は学而篇の第一章を指す）

も同書の番号による。

- （四）新日本古典文学大系25 渡辺実校注『枕草子』岩波書店 一九九一年）六六頁の注による。また、古瀬雅義「『枕草子』『憚りなし』の指示する『論語』基本軸——行成との会話を支える『論語』古注と章段構想——」稲賀敬二編・新典社研究叢書一一八『論考 平安王朝の文学 一条朝の前と後』（新典社 一九九八年 一六一～一八〇頁所収）は『枕草子』第四六段には『論語』学而八の古注が投影されているとする。
- （五）岡部明日香「しをれる松の心象風景——源氏物語賢木巻、桐壺院哀悼場面における論語古注の投影——」（『平安朝文学研究』4巻 一九九五年 二四～四八頁）は桐壺院崩御後における院御所の五葉松についての「雪にしをれて、下葉枯れたる（雪の重みでしないたわんで、下葉が枯れている）」という描写は子罕二九の「子曰、歳寒くして、然る後に松柏の後に凋むを知る」に対する古注が投影しているとする。
- （六）古澤未知男「漢籍引用より見た徒然草の一考察」（山岸徳平編『日本漢文学史論考』岩波書店 一九七四年 三七一～三九三頁）は『徒然草』における『論語』からの摂取として一八例を挙げる。また、曹景恵『日本中世文学における儒釈道典籍の受容——『沙石集』と『徒然草』——』（台北・国立台湾大学出版中心 二〇一二年）は『徒然草』の時代にはすでに新注が渡来していたとするが、『徒然草』における『論語』関連箇所には新注説の影響は認められないと結論付けている。
- （七）日本古典文学大系66 木藤才藏・井本農一校注『連歌論集 俳論集』（岩波書店 一九六一年）所収の『さゝめごと』一九六頁
- （八）『新編国歌大観』第五巻（角川書店 一九八七年）による。本論文で『国〇巻一数字』とあるのは、『新編国歌大観』による。また、歌番号は同書における番号である。
- （九）『私歌集大成』第七巻（角川書店 一九八三年）による。本節で「私〇巻一数字」とあるのは、『私歌集大成』による。また、歌番号は同書における番号である。
- （一〇）『私歌集大成』第七巻の解題一二一八頁によれば、飛鳥井雅敦の生年は天文一七（一五四八）年、没年は天正六（一五七八）年。
- （一一）『私歌集大成』第七巻の解題一二四〇頁によれば「実条Ⅷ 実条公御

詠草』は慶長一五（一六一〇）年から一七（一六二二）年の四四首を取る。

(12) 古注本は濁点を付けずに「ミタヒ」とする本が多い。

(13) 建武四（一三三七）年清原頼元点（巻一〜六）及び康永元（一三四二）年清原良兼点（巻七〜十）の『建武鈔本論語集解』。大東急記念文庫蔵『論語集解』の複製本である蒲田清次郎編『建武四年鈔本論語』による。

(14) 東京都立中央図書館・青淵論語文庫（青八九）『元龜抄本論語』存三卷（巻一・二・十）桂庵玄樹点、春永書による。桂庵玄樹の生年は応永三四（一四二七）年、没年は永正五（一五〇八）年である。

(15) 「交」の次に「言」の字無し。

(16) 松山玖也編『桜川』は延宝二（一六七四）年刊。翻刻版の『桜川』（財団法人大東急記念文庫 一九六〇年）及び加藤定彦解説『桜川上巻』（財団法人大東急記念文庫 一九八五年）によった。なお、数字は巻頭句から数えて何番目の句かを示す。

(17) 「ならがしは」は「檣柏」であろう。「なら」は「習ふ」を掛けると思われる。

(18) 松永貞徳が林羅山（道春）と深い交流があったことについては小高敏郎『新訂 松永貞徳の研究』（臨川書店 一九八八年復刻版発行）において紹介されている。

(19) 新村出校閲、竹内若校訂『毛吹草』（岩波書店 一九四三年）一〇一頁による。

(20) 高山寺典籍文書綜合調査團編（代表者 築島裕）『高山寺古訓點資料 第一』（高山寺資料叢書第九冊）（東京大学出版会 一九八〇年）による。同書の解説によれば、鎌倉初期の加點と見られるとのこと。

(21) 石塚晴通・小助川貞次解題『重要文化財 論語集解 正和四年写』東洋文庫善本叢書11（勉誠出版 二〇一五年）による。

(22) 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ清家文庫S1121『論語』（室町期写）による。

(23) 閑堂學人解題『成實堂藏本論語鈔』（成實堂叢書第十編）民友社 大正六（一九一七）年複製本による。末尾に「文明七^乙 仲冬^未巳洗題」とある。文明七年は一四七五年。

(24) 永祿九（一五六六）年成立。東洋文庫・岩崎文庫の善本画像データC39『永祿本論語』として公開されている。

(25) 石川洋子『近世における『論語』の訓読に関する研究』（新典社 二〇一五年）一四八頁は「曰」を「ノタマハク」と訓ずるようになったのは、中世の『成實堂藏本論語鈔』からであるとする。

(26) 飯田正・榎坂浩尚・乾裕幸校注「古典俳文学大系4 談林俳諧集二」（集英社 一九七二年）。『論語』憲問四五から取り込んだ一節は九八〜九九頁に見える。

(27) 小高敏郎・森川昭・乾裕幸校注『貞門俳諧集二』（古典俳文学大系2）集英社 一九七一年による。「井坂春清孝俳旗事」は六七〜六七二頁に見える。

（よしだけんいち／近世俳文学）

